

私のお薦め

## 坂口安吾「夜長姫と耳男」

長期間、一心不乱で何かに打ち込んで何かを作り上げようとしたことのある人なら、この作品の良さに共感してもらえらると思う。

小説「夜長姫と耳男」(昭和27年)は、若いタクミである耳男(みみお)が長者に招かれて、姫のための仏像を刻むという話である。正確には、姫の気に入るような仏像とは別のものにイノチを吹き込んでいく耳男と、彼を取り巻く人間模様を描いた作品である。一心不乱で、また同時に不安定な精神状態の中で意志を貫き、耳男のギリギリの思いが像として具現化していく過程が美しい。また、醜い光景も含めたすべての光景の中から、他にも美しい何かが強く描かれている作品である。

本作品中の耳男の回想で、耳男が昔、片手片足を骨折して激しい痛みと戦いながらも親方のもとでタクミの仕事をし遂げる場面がある。両手両足が使えるようになってからそのときの作品を眺め直してみても、特に手を入れる必要がなかったという。本作品ではこの回想を超える形で、耳男はひとつのすばらしい像を完成させている。

坂口安吾は随筆「日本文化私観」の中で述べているように、文学を含めたあらゆる芸術は「やむべからざる必要」によって作られてのみ、美を生むことができるとしている。小説「夜長姫と耳男」もまさしく、坂口安吾が必要のままに筆を走らせた結果の産物なのであろう。耳男が完成させる像の美しさや、像を完成させる耳男自身の美しさ、姫の言葉の不思議な美しさ、そして、本作品全体を俯瞰したときの美しさもすべて、「やむべからざる必要」によって生み出されているように感じられる。

本作品ではもう一点、耳男と姫の関係も印象的である。恋で語られるような安易な感情ではなく、対立や葛藤を通じての得体の知れない感情が本作品には満ちている。直接的に描かれる耳男の心境とは別の形で、耳男の隠れた心境も遠回しに描かれているところは坂口安吾の表現力のすごさだと思う。

私が本作品に惹かれるのは、私自身が学生時代に短期間ではあるが、一心不乱に研究に打ち込んで論文を書き上げた記憶があるからだと思う。研究本来の探究心だけではなく、達成欲や自尊心も入り混じった不安定な精神状態で、一心不乱で研究に打ち込んだ。その感覚に近いものが本作品でも描かれているのかもしれない。一心不乱で何かに打ち込んだことのある人なら、本作品で同じ共感を得られるのではないかと思う。

私は本作品を講談社文芸文庫「桜の森の満開の下」という坂口安吾の小説集で読んだ。その中でも特に、「夜長姫と耳男」と「桜の森の満開の下」については、坂口安吾の描く美しい世界が短い文章の中にうまく収められており、完成度が高い。また、坂口安吾は小説だけではなく随筆もお薦めしたい。美しさというよりは、坂口安吾の文学観や世界観が正面から文章に書き下ろされており、非常に読みごたえがある。

成川淳(なるかわあつし)